

今昔物語集の表記より 片仮名交り文の起源に及ぶ

門前正彦

178

〔要旨〕

まず、今昔物語集と鈴鹿本等古本系で、大書の漢字と小書の片仮名の併用で記された助動詞の表記の実態を検討するに、表記主体の態度として片仮名は漢字に従属し、どの語か、どの活用形かを示すことに意を用いている。他に本集の表記の特徴としては、語序がほぼ日本語のままで、特定の返読される文字を有することから、続日本紀宣命と極めて似た表記法であり、いずれも日本語の正確な再現を意図したものである。そこで、片仮名交り文の起源に關する春日政治博士の説「片仮名宣命体は漢文訓読から発生したもので、奈良朝からの宣命体の真仮名を略体仮名にしたものではなく、全然新しく創められた宣命体である」を再検討し、かならずしも全面的には、承服しがたい点を明らかにする。最後に、表語的表記（漢字）と表音的表記（万葉仮名・片仮名）を併用して、日本人がみずから日本語を表わした「表記体」の歴

史の一として、万葉・宣命から今昔、さらに延慶本平家という流れを想定する。

はじめに

周知のごとく、今昔物語集^{〔1〕}の古本系の表記は、大まかにいえば自立語は漢字で大書し、附屬語は片仮名を小書したいわゆる片仮名宣命書きに従っている。その中で、助動詞「ズ」「ザリ」「ジ」「マジ」「ナニソ」「デ」も含む）・「ベシ」（「ベカリ」を含む）・「シム」・「ル」・「ラル」は、主として「不」「可」「令」「被」によって返読表記がなされている。しかし、その表記法はそれぞれ教種類もあり、一見、統一されていないように見える。本稿ではまず、それぞれの助動詞の表記の実態を、教種ある中のどの形が中心であり、それが如何なる理由によるものか、古本と流布本においてその表記に違いがあるのか、等を調査・考察し、次にそれに関連する諸問題を考えたいと思う。

調査には、日本古典文学大系『今昔物語集』を用い、日本古典文学全集『今昔物語集』を参照する。最初に、大系本が底本とした諸本とその巻数を記しておく。

古本

○鈴鹿本（第一等資料）⁽²⁾

巻二・五・七・九・十・十二・十七・二十七・二十九

○東大本甲（第二等資料、ただし十六・十九はこれに準ずるもの）

巻一・三・四・六・十三・十四・十五・十六・十九

二十二

○実践女子大本（第二等資料に準ずるもの）

巻二十

右の巻々のなかでは、巻十六・十九（東大本甲）、二十（実践女子大本）の底本と他の古本の東北大本・国学院大本の本文は比較的損壊を受け、古本そのものよりはやや遠ざかっていると考えられ、その損壊の程度は巻二十がもっとも甚だしいとされる。

流布本

○内閣文庫本A（第三等資料、ただし二十八・三十・三十一は第二等資料に準ずるもの）

巻二十四・二十五・二十六・二十八・三十・三十一

○東大本乙（第三等資料）

巻二十三

○東大本甲（流布本、第三等資料）

巻十一

このなかでは、巻二十八・三十・三十一の三巻は、その底本とした内閣文庫本Aの本文が比較的忠実に古本の姿を伝えていると考えられる。以下、流布本と称する場合、この三巻を除く巻十一・二十三・二十四・二十五・二十六の五巻を示す。

一

本集の助動詞「ズ」・「ベシ」・「シム」・「ル」・「ラ」の表記のうち、古本系と流布本系によって、とも大きな違いを見せるのが「ズ」の表記である⁽³⁾

まず、「ズ」は「ガリ」・「ジ」・「マジ」・「ナ」・「ソ」・「デ」も含むの表記法八種を仮に動詞「行ク」を例として示す。本文においては上に記した符号を用いる。

A 不口ズ 「不行ズ」と記して「ユカズ」、あるいは「不行ズ」を「ユカガリ」と訓むことができる。これは漢字「不」で表意的表記された助動詞「ズ」・「ガリ」・

ジ」「マジ」「ナ」「ソ」「デ」、またはその活用形を片仮名で全形を完全に小書したものである。

B 不口「不行」と記して「ユカズ」あるいは「ユカザリ」等と訓む。助動詞を片仮名では全然記さない。

C 不口活用語尾ナズ「不行ナズ」というように、動詞等の活用語尾を示し、「ズ」と仮名で記す。Aともいえる。

D 不口活用語尾 Cとは違い、「不行カ」というように動詞の活用語尾のみをカナで記して「ユカズ」と訓む。

E 不口リ「不行リ」これはA・B・C・Dとは違い、「ザリ」の場合に限ってこの表記がなされる。「ザリ」の活用語尾だけを記して「ユカザリ」と訓む。これもAといえよう。

F 不口活用語尾ナリ「不行ナリ」は、Eと同様「ザリ」に限るが、これは動詞の活用語尾をも記して「ユカザリ」と訓む。

G ロズ「行ズ」あるいは「行ズ」のように仮名で記す。

二

A「不口ズ」は、「不」の表わす語・活用形を、片仮名で完全に直接明示する形であり、B「不口」は、一切

語・活用形を示さない漢文的表記（下に接続する語によって間接的に活用形は判る）である。

古本系と流布本系の違いをもっとも顕著に示しているのがAとBの表記である。すなわち古本では、Aが卷二十の7%を除くほとんどの巻で80%以上となって、助動詞「ズ」を表記する場合の代表であり、Bは、卷二十の20%を除くほとんどの巻で5%以下となっている。伝写の間に、他からAに転化したものがある可能性は皆無ではないが、古典大系の指摘は大体妥当であらう。これに對して、流布本ではBがAを上回り、卷二十六に至っては、Aが8%、Bが70%というように、Bが「ズ」の表記の中心となっている。

それでは、古本そして流布本におけるA・Bの表記が如何なるものであるかと、「不」で示される助動詞「ズ」「ザリ」「ジ」「マジ」「ナ」「ソ」「デ」との関連において見てゆくことにしよう。

まず、古本におけるA「不口ズ」の片仮名の部分には前述した打消のすべての助動詞が出現する。そのなかで多いのは連用形・終止形「ズ」および連体形「ヌ」である。Aのように助動詞が小書の片仮名で、完全な形で記

されるのは、「ベシ」「シム」「ラル」がその活用語尾だけを片仮名で記すのと同じ意識で、漢字で大書された助動詞のうち、どの語で、どの活用形かを明示せんが為のものであろう。また、「ザリ」はE・FだけでなくAでも、「マジ」はAまたはGでも記されるのは、Aが今昔の代表的な表記法であるからであろう。

次に、古本におけるBであるが、ほとんどの巻が5%以下であり、古本全23巻(巻二十八・三十・三十一を含む)の用例数のうち九割弱が、「不」の示す助動詞が連用形・終止形の「ズ」もしくは連体形「ヌ」で、一割強が「ザリ」・「ジ」である。つまり、「不」が示す助動詞のうち、もっとも一般的な連用形・終止形「ズ」・連体形「ヌ」がAだけでなくBでも記されることがあり、用いられることの少ない「マジ」「ナ」「ソ」がBで記されることは全くないのである。

さて、古本におけるAとBの割合を見ると、巻一・十六・十九・二十の四巻でAの割合が他巻より少なく、Bの割合が他巻より多い。巻二十七以降のAの減少は、C「不活用語尾+ズ」の増加と関係があるので、ここでの説明は省略する。

巻一では、天竺部における他の四巻とはその割合が少し違っている。これは、やはり『今昔物語集』全巻の始めの為、表記法がまだ充分に定まっていなかった(7)と考えるべきであろう。このことは、他の三つの助動詞「ベシ」「シム」「ル」「ラル」の表記においても同じことがいえるのである。巻一の表記が天竺部の他巻と若干違っているのは、「鈴鹿本」を存せず、「東大本甲」を底本としているからではないだろう。なぜならば、「鈴鹿本」を底本とした八巻(巻二・五・七・九・十・十二・十七・二十七)における「鈴鹿本」と「東大本甲」との「ズ」「ベシ」「シム」「ル」「ラル」の助動詞の表記の異なりを、古典大系の校異によって調査すると、差異がそれ程見出せなかった(8)からである。これから、同じ古本である「鈴鹿本」と「東大本甲」において、助動詞の表記の違いはそれほどないと考えてもよいのではないか。

また、本朝における巻十六・十九・二十の三巻が他巻とは違っているのは、前述したように、それらの古本の本文が比較的損壊を受け、古本そのものよりはやや遠ざかっているからであろう。

では、流布本におけるA・Bの表記は如何なるもので

あろうか。

まず、Aの表記について見てみよう。古本では「ズ」「ガリ」「ジ」「マジ」「ナ・ソ」「デ」と数種ある助動詞のすべてが、「不」と共に片仮名で記されて現われていたが、流布本では、巻十一・二十三・二十四・二十五・二十六と巻によって、そこに出てくる助動詞はかわっている。

(流布本 A の表記)

巻数	語	巻十一	巻二十三	巻二十四	巻二十五	巻二十六
ズ		$\frac{19}{152}$	$\frac{10}{76}$	$\frac{9}{166}$	$\frac{2}{123}$	$\frac{2}{200}$
ガリ		$\frac{0}{22}$	$\frac{8}{21}$	$\frac{0}{38}$	$\frac{0}{22}$	$\frac{0}{38}$
ジ		$\frac{0}{4}$	$\frac{7}{10}$	$\frac{5}{11}$	$\frac{4}{22}$	$\frac{1}{26}$
マジ		$\frac{0}{1}$	$\frac{1}{2}$	$\frac{4}{6}$	$\frac{8}{8}$	$\frac{8}{16}$
ナ・ソ					$\frac{4}{4}$	$\frac{3}{3}$
デ			$\frac{9}{9}$	$\frac{24}{25}$	$\frac{14}{18}$	$\frac{15}{22}$
計		$\frac{19}{179}$	$\frac{35}{118}$	$\frac{42}{246}$	$\frac{32}{199}$	$\frac{25}{307}$

右の表は、それぞれの助動詞について、Aで記されている実数を示したものであるが、分母はその全用例数、分子はAで記された用例数である。この表を見ると、「ズ」「ジ」がAで記される用例数が減少し、「ガリ」は巻二十三以外には見られない。これは、Bの増加、あるいは「ガリ」が他の助動詞とは区別されるE・Fの増加によるものである（その項で述べる）。また「マジ」「ナ

・ソ」「デ」は、主にAもしくはGで記されるが、Aのように「不」と共に片仮名で記す必要性があったと考えられる。

さて、流布本におけるBであるが、その割合はAを上回り、「ズ」の表記の中心となっている。古本では、その割合は非常に少なく、「不」の示す助動詞は、主に「ズ」であったが、流布本ではどうであろうか。次に、流布本五巻のBにおける「不」が示す助動詞それぞれの実数を表にしたものを示す。「マジ」「ナ・ソ」「デ」は、このBで記された用例がないので省く。また、表中の分母はその全用例数、分子はBで記される用例数である。

(流布本 B の表記)

巻数	語	巻十一	巻二十三	巻二十四	巻二十五	巻二十六
ズ		$\frac{112}{152}$	$\frac{48}{76}$	$\frac{116}{166}$	$\frac{86}{123}$	$\frac{167}{200}$
ガリ		$\frac{5}{22}$	$\frac{6}{21}$	$\frac{3}{38}$	$\frac{2}{22}$	$\frac{28}{38}$
ジ		$\frac{2}{2}$	$\frac{1}{10}$	$\frac{6}{11}$	$\frac{15}{22}$	$\frac{20}{26}$
計		$\frac{119}{179}$	$\frac{55}{118}$	$\frac{125}{246}$	$\frac{103}{199}$	$\frac{215}{307}$

この表を見ると、やはりもっとも一般的な「ズ」が多い。しかし、古本においてはBは「ガリ」「ジ」にはあまり用いられなかったのに比べると、流布本では、この二種

特に「ジ」がBで記される傾向がある（「ザリ」は、Eの増加と関連があるのでその項で述べる）。しかし、巻二十六に關しては、そのEの割合は他の流布本に比べ、2%と少なく、「ザリ」は主にBで記される。つまり巻二十六においては、「ズ」だけでなく「ジ」「ザリ」をもBで記され、その他「デ」「マジ」「ナ」「ソ」がAもしくはGで記される。したがって、その表記は完全にBが中心となり、「ベシ」においても全巻を通じて巻二十六のみが中心となる表記であることを考えあわせると、巻二十六は、流布本五巻の中にあつて助動詞表記法が特異な巻である。

三

AとBの比率は、古本と流布本の違いをもっとも顕著に示していたが、C「不口活用語尾ナズ」とD「不口活用語尾」でもその違いがはつきりとわかる。CとDは同じように動詞の活用語尾を片仮名で記してはいるが、「不」が示す助動詞を片仮名で記すか否かの違いであり、その点、CはAと、DはBと同じグループであるといえる。CとDを比べた場合、古本においては、Cは多少の増減は巻によつてあるが、どの巻でもその例は見られる

のに反して、Dは巻十四の一例を除き全く見られない。これは、さきにAとBを比べた場合においても、Aが表記の主流であり、Bが少なかったという傾向と全く同じである。逆に、流布本において、DがCを上回っていることは、BがAを上回っていたことと同じ傾向である。では、C・Dのように動詞の活用語尾を記するという表記が如何なるものであるか、その必要性というものを、C・Dで記される動詞を中心に考えてゆきたい。

まず、古本におけるCでは、その用例として多いのは「不見^{ミナ}」そして「不^{オボ}思^ボ」である。前者は、下二段の動詞「見ユ」の否定形であるが、この場合、上一段の動詞「見ル」の否定形「見ズ」と区別する為に動詞の活用語尾を記したと推定できよう。次に「見ユ」と「見ル」の否定形がCとAで記されている例を挙げておく。

「今二人モ同^ニ房^ニ来^ル」思^シ見^ル不見^{ミナ}紙燭^シ火^ノ光^ハ泡^ハ内^ニ移^ル失^ル然^ル今二人ハ火^ノ光^ハ尾^ハ不見^{ミナ}止^ル 地蔵ノ加護ヲ可蒙キ心ノ无^ク諸^ノ流^ハ（卷十七 第十三話）また、「不^{オボ}思^ボ」は、「思^シホユ」の転である。「覺^カユ」の否定形だが、この場合も、四段の「思フ」の否定形「思ハズ」と区別する為にCを用いたと推定される。その他、

尊敬の助動詞「給フ」や「出^{イダ}」の他動詞形「出ス」、
落^オツ^ツの他動詞形「落ス」、^オ「聞ク」に対して「聞ユ」
等が、Cにおける動詞として比較的多く用いられる。

さて、卷二十七以降五卷におけるCの割合が15%前後
と、他の古本系の巻よりも多くなっているのはどうして
だろうか。これらの五巻においても、前述の動詞が比較
的多いが、特にこの五巻のCは、助動詞「シム」にかわ
る「ス・サス」の増加と関係深いように思われる。たと
えば、動詞「知ル」に助動詞「ス」、「ズ」と接続する
「知ラセズ」を記す場合、このCで「不知^{シラセズ}」と記され
る。しかし、卷二十以前の巻において、まだ「シム」が
比較的多く用いられている場合、「シム」に接続すると
「不^{シラシメズ}令^{シメズ}知^{シラシメズ}」というようにAで記されることになる。し
たがって、Cの活用語尾というのは、動詞の活用語尾と
いうだけでなく、助動詞「ス」、「サス」あるいは「タ
リ」などが動詞に接続し、これを片仮名で記す場合も含
んでおり、この五巻におけるCの増加は、「ス」、「サ
ス」の増加によるものであると考えられる。次に、「知
ラズ」がAで、「知ラセズ」がCで記されている例を挙
げる。

184

故免共ハ努^ツク此ノ事ヲ不知^{シラセズ} 只偏ニ件人ノ男ヲ憑
テ夜打深更ル程ニ其ノ家ニ行テ門ヲ押^オテ 男支度^シ
事^シ行テ門ヲ開^キテ、走り返テ板敷ノ下ニ深ク這入ヌ。
此ル奴原ハ獄ニ禁^シ後ニ出テ定^シ悪キ心有ハ思^ハ
然リ氣无^シ、人言不知^{シラセズ}シ夜ニ入テ竊ニ外ニ將行テ、
皆射^シ斃^スリテ (卷二十九 第六話)

では、古本にた、た一例見られるDとは如何なるもの
であろうか。

而^{シテ}、方便品、比丘偈ニ二字ヲ忘^ステ不思^ハエ
心ヲ盡^ステ思^ハ 其ノ二字忘^ステ遂ニ不思^ハエ。

(卷十四 第十一話)

やはり、「思ユ」の否定形「思エズ」であるが、Dで記
された後、同じ表現がCで記されている。これは、前の
「不思^ハエ」を如何に訓むかを示さんが為に「不思^ハエ」と
Cで記したとも考えられよう。

次に、流布本のC・Dであるが、古本では一例しか見
られなかったDが増加し、Cを上回る。活用語尾を片仮
名で記すCとDにおけるこの傾向は、古本では数%しか
見られなかったBが、流布本ではAを上回り「ズ」の表
記の中心となる傾向と同じである。つまり、「不^ハ」が示

す助動詞を片仮名で特に記さないという点において、DはBと同じグループで、その助動詞も終止形「ズ」がもつとも多いが、巻二十四・二十五・二十六では「ザリ」「ジ」「デ」等も数例見られ、これもBと同じ傾向にある。また、CもしくはDを用いる助動詞は、古本におけるC同様、当然「見ユ」「思ユ」等が多い。したがって、その助動詞によって活用語尾が片仮名で記される必要性のあるものがC・Dで記されたのであって、本質的にはCはAに、DはBのグループに属するものと考えられる。

四

「ザリ」を記す場合に用いられるE「不ロリ」・F「不口活用語尾ナリ」について述べる。「不」で示される助動詞「ズ」「ザリ」「ジ」「マジ」「ナ」「ソ」「デ」のうちもつとも一般的なものには「ズ」であるが、ついで多いのが「ザリ」である。「ザリ」は「ベシ」「シム」と同じようにその活用語尾だけを片仮名で記することによって、「不」が示す助動詞が「ザリ」のどの活用形であるかがわかる。したがって「ザリ」は、AだけでなくEで、あるいは、流布本に四例だけ見られるFのような表記もなされたのである。「マジ」は、その用例数の少な

い為、または「ジ」との区別の為か、活用語尾だけを片仮名で記す表記は、古典大系によれば三算資料の巻二十五の第四話に「何ぞ不思^スダトモ无端^ム事也」と一例あるのみで、その他すべてがA・Gで記される。

さて、古本ではAの表記が中心である為、「ザリ」も主にAで記され、各巻わずかに数例がEであり、Fではまったく記されていない。しかし、流布本では、そのEの割合が、巻十一は9%、巻二十三は4%、巻二十四は13%、巻二十五は9%、巻二十六は2%となつて、多い巻がある。これは、「不」で示されるすべての助動詞を含めた割合であるので、「ザリ」についてどの表記を用いたのか、左の表に示す。

（「ザリ」の表記）

巻数	巻十一	巻二十三	巻二十四	巻二十五	巻二十六	型
		8				A
	5	6	3	2	28	B
		1				C
			1		1	D
	16	5	32	19	7	E
	1		1	1	1	F
		1	1		1	G
計	22	21	38	22	38	

この表によれば、流布本五巻のうち、巻十一・二十四・二十五の三巻が、主にEで記され、巻二十三では、A・

B・Eとその表記は定まっていな。このように、流布本では「ザリ」は、Eで記される傾向があるが、EはAの省略表記で、AからEへの移動ということも考えられよう。卷二十六では、その大部分がBで記される。つまり、卷二十六は「ズ」「ジ」「ザリ」の大部分をBで記している特異な巻であることがわかる。

最後に、Gであるが、これは表意的表記「不」とまったく用いず、片仮名だけで助動詞を記す表記法である。

古本ではAが中心である為数が少なく、その傾向性はそれほど明瞭ではないように思われる。しかし、Bが中心たる表記となる流布本、特に卷二十六では、「マジ」「ナ」「ソ」そして「ズ」の已然形「ネ」が主にGを用いて記される。卷二十六が、漢文的表記Bが多い反面、和文的表記Gが多いことは、一見矛盾しているようであるが、古本のようにAを中心として、助動詞が「不」と共に片仮名で記してあるのとは違つて、Bが中心的表記であれば、その用創数の少ない「マジ」「ナ」「ソ」「ネ」をBで記す訳にもいかなないので、Gで記さなければならぬ必要が当然あったと考えられる。それ故、Bの増加と共にGが増加したのであろう。次に卷二十六において、A・

186

B・Gのそれぞれの表記がなされている例文を挙げる。
僧、其ヲ見テ不食ヲ居ル。此漢黄、男出来テ。「何
ド此不食」ト。僧、「幼子法師ニ罷リ成テ後、未ダ
此物ヲ食ス。此ヲ見居テ侍ル也」ト云ハ、漢黄ノ
男、「現ニ其ハ然モ侍ル。然トモ今ハ此御マシタバ、
此物共不食」テ否不有。……然リトテ今ハ外ハ可御
方モ有。只申ニ随テ御セト云ケバ僧、「此ヲ云ニ違
チ心ヲ持成テ、被致キシ為ム」ト云フ。

五

(卷二十六 第八話)

以上、「不」で示される助動詞「ズ」「ザリ」「ジ」「マジ」「ナ」「ソ」そして「デ」の表記法七種について述べてきたが、これら「ズ」で代表される助動詞の表記が、現存する古本系と流布本系では違いが顕著であることがわかる。

古本においては、AもしくはCのように「不」と共に片仮名で助動詞を記した表記が中心であり、流布本においては、BもしくはDのように助動詞を片仮名では記さない表記が中心である。そして、古本におけるA・Cのように助動詞そのままを片仮名で記すのは、「ベシ」

がその活用語尾を片仮名で記すのと同じ意識で、つまりどの助動詞のどの活用形であるかを直接示さんが為の、読解を意識しての表記であり、「ベシ」に関して、やはりその表記は同様である。本集諸本でのBの表わす語の変化は、漢字「不」と語との結びつきの意識の程度を示すものとして、はなはだ興味深い。Bが少なかった古本では「不」の示す助動詞は、もともと一般的な連用形・終止形「ズ」もしくは連体形「ヌ」であり、これらも大部分がAで記されていた。流布本では「ズ」「ヌ」の大部分が勿論Bで、さらに「ジ」もBで記す傾向にある。特に、卷二十六においては「ズ」「ヌ」「ジ」の他に「ザリ」もBで記され、その他、「デ」がAで、「マ」「ナ」「ソ」が已然形「ネ」がGで記されるというように、Bを中心とし、用例数の少ないものを片仮名で記して区別している。この卷二十六が流布本五巻の中にあつて、やや特異な巻であることは、「ベシ」の表記の場合も同様で、この一巻のみ、Bが中心たる表記となっている。しかし、これはこれで活用形を示そうという意識は、やはりある程度は感じられる。

六

紙数も残り少なくなったので、助動詞「ベシ」「シム」「ル」「ラル」についての調査結果は、略述するにとどめる。

「ベシ」の表記は、「ズ」ほどではないが、やはり同様な傾向が見られ、「ズ」のAに準じるA「可□シ」が主流をなしている。古本系のB「可□」は、大部分が「不可□ズ」で、「ーベカラズ」と訓むことができる例である。だから、古本の各巻のBの増減は、「不可□ズ」の多少によつていともいえよう。流布本のBは、古本ではAで記されていた終止形・連体形が目立つ。また、古本ではC「可□活用語尾+ベシ」・E「可□ベシ」が、流布本ではD「可□活用語尾」・F「可□リ」という具合に、古本と流布本の違いも見られる。さらに、G「□ベシ」がほとんどの巻に10%前後で、巻によつては20%以上もあるのは、注目すべきである。Gが天竺部⁽¹⁰⁾特に巻一に多いのは、「ベシ」の表記が定まっていなかったからであろう。

「シム」も傾向としては、A「令□ム」がB「令□」を上回つて、中心的表記となっている。はつきりしてい

るのは、「シム」に「ズ」・「ベシ」が接続する場合は、
Bで「不令□」・「可令□」と記されることである。連
用形「シメ」で終止形「シム」を区別する傾向もあり、
連体形「シムル」と已然形「シムレ」は、F「令□ル」・
「令□レ」で同様に区別される。G「□シム」が多く、
巻一が著しいのも、「ベシ」と同じ。

「ル・ラル」は、大勢としてA「被□ル」がややB「
被□」より多いが、G「□ル」・「□ラル」もかなりあ
り、不安定である。この点「シム」と共通点がある。巻
十五以降はBが主流となる。定まっているのは、「ズ」
あるいは「ベシ」が接続して、「ーレズ」・「ーラレズ」
あるいは「ールベシ」・「ーラルベシ」の場合はBである
ことである。天竺部巻一では、「ル・ラル」の80%まで
Gで、徐々にGが減少する。四種の助動詞中も、とも表
記が不安定といえよう。連用形「レ・ラレ」はBになる
傾向もある。

七

以上をまとめるならば、主として漢字と片仮名を併用
した本集の助動詞表記「ズ」・「ベシ」・「シム」・「ル・ラ
ル」それぞれに、程度の差・動搖は認められるが、全体

として見た場合、きわめて整然とした表記方針が見られ
るように思う。すなわち、語、あるいは語形の明確な直
接表示を片仮名小書で意図したのが、鈴鹿本以下の古本
系諸本であり、その表記が伝写の間に崩れて行く姿を如
実に示しているのが、流布本系の表記の実態であろう。
本集の古本表記には一種の統一性・規範性すら感じられ
るほどであるが、また観点をかえるならば、各助動詞表
記のG（片仮名のみの表記）の巻一以下若干の巻々の姿
は、漢字主体の表記から片仮名表記への萌芽を示してい
るともいえるのではないだろうか。

これまで、本集の返読字と片仮名を併用した助動詞表
記を見てきたので、それ以外の表記に少しばかり目をむ
けてみようと思う。すでに指摘されているように、自立
語の仮名書き大書⁽¹²⁾、拾仮名⁽¹³⁾、および返読字が本集の表記
の特徴といえよう。

まず、仮名書き大書の性格であるが、各巻で多少の増
減はあるが、ほぼ全体的に現われて、「和文特有語・俗語
といった性格が強く、漢字との結び付きが弱い語である
といわれている。

拾仮名は訓点資料には、ごく一般的に見られるもので

ある。難読の語ではなく、よみかたの紛らわしい語につけて、よみを助ける為と思われる。

返読字が若干あることも指摘されている。「難」はほぼ全巻返読であるが、他の「无」「如」「毎」「于」は、後には特定の語と共にだけ用いられている。

仮名書き大書と捨仮名は、一言でいうならば、日本語の正確な再現をめざしたものであろう。

さて、他の説話集、たとえば『打聞集』が同じような「表記体」をとりながら、きわめて不統一であるのと比べて時に、本集古本の統一的表記から考えると、本集の撰者は単数⁽¹⁵⁾で、しかも、正確な解説を期待してなされた表記、という可能性も十分考えられるのである。また、撰者が直接利用した文献の中には、漢字片仮名交り文の形態をもつ説話集もあつて、それを表記面である程度整理したのだからということも、当然想像されるのである。

ここで、先学のひそみにならうて、『今昔物語集』はよめるか⁽¹⁶⁾という質問に解答を用意しなければならぬなら、ば、同種のものに比べて、かなりの程度にはよみうる、と答えるを得ない。今昔撰者の表記意図と現在の我々の知識とが算しくはないために、今のところは、ま

だ不確かな部分が残されてはいるけれども。

八

これまで『今昔物語集』の表記について述べてきた関連から、当然ここで考えなければならぬ問題がある。いわゆる漢字片仮名交り文の起源について、一言ふれておこう。春日政治博士は、西大寺本最勝王経の例から、

片仮名交り文は漢文を訓読した人が、その訓読する際に施した訓点の手法をそのまま自作する文章に利用して、一層読み易くその形式字を実質字の下に書込んで了った処に生じたものといふことが出来る。

それ故その初に於てはその語序が漢文流であつて反読されたものがあつた。之は今昔物語様式の文にまで、その一部の名残を留めてゐる。(略)かくて今の片仮名交り文は漢文に最も近い所から出発して、それが漸次和風に成下つたものと見なくてはならない。

と述べられた⁽¹⁶⁾。右の説は、以来この問題に関してほぼ定説となつた観があつた。最近これに対する修正意見⁽¹⁷⁾も一二見られるが、筆者には、なお不十分であるように思われる。

一般に、漢字文献あるいは漢字を主とした文献で、「漢文式表記」などとおおまかにいわれている現象は、もう少し厳密に分けて考える必要があるように思う。本稿に關係する範囲内では、一つは語序（たとえば、述語―目的語など）の問題であり、他の一つは返読字である。今昔の返読字は、今まで主として述べてきたように、助動詞の表記に用いられた「不」「可」「令」「被」と、あとには「無」「奉」「如」「難」「雖」「每」「乍」「于」「自」「從」「所」が用いられているだけで、語序は日本語の、目的語―述語の順序になっているのである。したがって、春日博士が「片仮名交り文は」その初に於てはその語序が漢文流であつて反読されたものがあつた。之は今昔物語様式の文にまで、その一部の名残を留めてゐる。」と述べられたのは、いささか問題であつて、現在『打聞集』などに見られるわずかな漢文式語序が、「一部の名残り」か、どうかは簡単にはいえないように思う。つまり、今昔と純日本紀宣命⁽¹⁸⁾とは、表記面についていうならば、一部分の違いを除いて、きわめて共通面の多いものといふのである。

ところで、この返読字というのは、はたして「漢文式

表記」と断言できるものだろうか。私はこれについては疑問に思う。宣命や万葉（一字一音を除く）にも、多少の事情の違いは存するにしても、同様にほぼ日本語の語序で、しかも一定の返読字を有している。特に和歌の万葉の表記の中においてすら、この返読字がすでに存在しているということは、大いに注目しなければならぬと思う。

いわゆる音訓交用体（表意的表記と表音的表記の併用で、「非略体」⁽¹⁹⁾あるいは「古体」⁽²⁰⁾とよばれる万葉歌から、宣命大書体・宣命小書体（日本語の語序で、返読文字あり）へ、さらに今昔（宣命にほぼ同じ）、延慶本平家（宣命・今昔にほぼ同じ）という日本語の表記体の流れを考えた場合、宣命と今昔の間に大きな断絶を設ける春日説は、きわめて不自然な点があると思われるが、どうだろうか。

前に引用した文に続けて、さらに春日博士は、金光明最勝王經註釈古点を、「亦相当豊富に片仮名交り宣命体を有してゐる」として返読すべき例をあげた後、

意云斯、鬼眼與法眼、修ス事圓滿⁽²¹⁾ニ由テ⁽²²⁾（巻四）

川日圓、如シテ光炎⁽²³⁾三摩地⁽²⁴⁾（巻四）

ハ馬云見不思議義、准古經可ル不思議、義ヲ照タラフ

(卷四)

沿川又方尼門、无盡无滅ヲ獲得ス、又方尼門、盡无ヲ

滅无ヲ有令

(卷四)

持業釋川事ヲ起ス心、隣近釋川、起事心ト(卷二)

右の例を示された後で、次のように述べられる。

さて上掲の如くこの經に書かれた片仮名交り宣命体は可なり豊富な資料を給してくれるのであつて、誠に貴重すべきものである。而して、已に全く書下し体にまで進んでゐて、僅かに反読のものを存してゐる。

飯室切(最勝王經註釈)は、成実論天長五年点と仮名字体・乎已止点の大部分が一致して、同一人の手かたさへ疑われるほどで、西大寺本最勝王經と同時期の加点とされ、両者の先後は、わずかに片仮名交り文が漢文様式か、和文様式かによつて、西大寺本が前、飯室切と後とされてゐるものである。ところが右に引用した飯室切の諸例を、春日博士は漢文様式の片仮名交り文が「已に書き下し体に進んだもの」と見ておられるが、前引の「漸次和風に成下つたもの」という説明と比べ合せた場

合、然然としないものが残るように思う。

春日説のもつとも重要な疑問点は、引用された例を再検討するに、飯室切の註記の類に漢文的語序と和文的語序の二種類の片仮名交り文があることを、せつかく発見されていながらも、あるいは分量の多少でか、漢文的語序の方をあまりにも重視された結果、和文的語序の方は、その書き下しと簡単に判断されて、しかもその理由を何も説明されていないところにある。

筆者は、飯室切の例は平安極初期の訓点書込み文の中では、きわめて重要な事実を示しているものとして重視する。いずれもが、日本語の語序の漢字片仮名交り文(片仮名宣命書き)の最古の例となるものであるからである。これが、表記に限つていえば、宣命・万葉・今昔・延慶本平家などの文章と同一系統のものと思うのである。春日博士の説の一部分は、「和文の語序の漢字片仮名交り文(片仮名宣命書き)もすでに平安極初期の訓点資料の書込み文中に見出され、この方は宣命、今昔などに連続する」と修正されるべきであらう。

ここで、すこしばかり筆者の推測を述べるならば、漢文の語序の片仮名交り文は、漢文にひかれたものであつ

て、やはり日本語の語序の片仮名交り文の方が、一般的であつたのではなからうかと思う。この系統の文章は、祝詞・宣命・万葉・和讃・講式・説話などに用いられており、「口誦性」⁽²²⁾という一面で共通性があるように思われる。

本稿の片仮名交り文の起源に関連する事項について、以下簡単に一応の見通しを記しておこう。

(1) 奈良・平安・鎌倉時代の日本語の文章を、試みに表記の面から分類すれば、おおよそ次のようになるであらう。

(ア) 純漢文 (イ) 準漢文 (ウ) 準和文 (エ) 純和文

(イ) は主として漢字を使用し、主に漢文式語序。

(ウ) 主として漢字を使用し、主に日本語の語序。返読字あり。

となる。これは従来のいわゆる「文体」の分類とも共通する点は、当然はなほ多い。

(2) 「東大寺諷誦文稿」の、片仮名交り文としては特異な表現をもった文章も、本稿で述べたような意味で考えれば、和文・漢文両方の語序を有することが説明できるところと思う。従来のこの文献に関する発言の中には、大

幅な再検討を加えなければならなくなるものもあるだらう。

(3) 『平家物語』の古態が、変体漢文を訓み下して片仮名交り文として成立したのか、^{*}問題である。簡単にはいえないが、筆者には、今まで述べた理由から見れば、片仮名交り文として成立したと見るのが、可能性として高いように思われる。

注

(1) 今昔の撰者については、酒井憲二氏「伴信友の鈴鹿本今昔物語集研究に導かれて」(『国語国文』44の10 昭50・10)の東大寺東南院の覚樹かとする説があるが、これには反論もある。鈴鹿本が「どうしても原本より直接写したときか思われない諸点がある」とする馬淵和夫博士「今昔物語集の成立」(『日本古典文学全集月報』51 昭51・3)の説もある。

(2) 『日本古典文学大系 今昔物語集五』解説 43P 参照。以下諸本の説明は、大系の解説による。

(3) 古典大系の各冊解説 表記法の項参照、たとえば、大系四 19P など。以下の分類も大系に従う。

(4) 現存する鈴鹿本と東大本甲の両者(巻二・五・七・九・十・十二・十七・二十七。巻二十九は東大本甲なし)で、「ズ」「ベシ」「シム」「ル・ラル」の表記の改変を大系校異で調査すると、各巻数例程度の差異で、東大本甲が、表記面で、鈴鹿本から大きく改変されたという確証は全くなかった。しかし、その中でも、鈴鹿本のC・G・Bから他の古本のAへ表記が変わった例はある。たとえば、C→A(底と甲) 巻十番290P-4、G→A(底と北) 巻九12番198P-9、B→A(底と甲北実因) 巻十二66番138P-16 など。

(5) 十三世紀前後の平仮名文集の動詞の調査に、佐藤克子「活用語の漢字表記に付せられた送り仮名について」の試論 歌集に見られる場合」(『成城文芸』六一)がある。

(6) 筆者は旧稿「聞きまがはさる」か「聞きまがはさる」か(『国語国文』25の12 昭31・12)、「漢文訓読史上の問題―打消の助動詞の連体形につ

いて」(『訓点語と訓点資料』ハ 昭32・9)、「成唯識論の「ざりぬる」というよみ方について」(同 十二 昭34・8)において、連体形「ヌ」「ガル」を調査して、「今昔物語集」の文章おぼえがき―打消の助動詞の連体形について」(『解説』3の2 昭32・1)を発表した。本稿のB表記を「ヌ」「ガル」どちらによむべきか、迷った記憶があるが、古本では「ヌ」の可能性が強い。Bは大系のよみに従えば、古本では「ザリ」「ジ」で一割強になる。しかし、「ヌ」とよめば、「ザリ」の例はほとんどなくなる。

(7) 大系一解説 20P など。

(8) 注4参照。

(9) 大系一解説 20Pで活用語の送り仮名を「活用語尾を―丁寧に送ることをしない場合が多い。しかるに、一方において右の原則と一見矛盾するかの如き印象を与えるものがある。それは活用語において是不変化部分についてまでかなを送り、……と指摘し、補注六四で「不榮給ハズ かような場合、古本はズのみを送ることを原則とし、ハは送らないこと

を建前とする。が、流布本はハズを送ることが多い。ただし、現在、我がが使用した古本には既に流布本に類する表現が少く散見する。(略)とあるのは、従えない。

(10) 小稿「^{旧蔵}地蔵十輪經卷第四の訓点(続)」(『論集日本文学・日本語 中古』昭52・11)349~353P 参照。

(11) たとえば、注4の調査と古本と流布本の比較から、
(一) A「不□ズ」↓B「不□」、(二) A「不□ズ」↓G「□ズ」の二極化現象が見られる。(一)は漢字「不」と語・語形の結びつく過程を、(二)は仮名の漢字依存からの脱却・独立を、示すのであろう。

(12) 山口佳紀「今昔物語集の形成と文体―仮名書自立語の意味するもの―」(『国語と国文学』45の8 昭43・8)

(13) 文法的要素を表音的・註記的に示すのが、助動詞表記であるのに対して、語の識別と同様に、全体で示せば全訓拾仮名、部分的にすれば拾仮名で、両者は車の両輪の如き関係であろう。

酒井憲二「表記史上の問題―捨てかなの場合―」

(『語文』三一 昭43)もある。

(14) 古典大系解説表記法の項参照。

(15) 注に参照。

(16) 「片仮名交り文の起源について」(『古訓点の研究』)

(17) 築島裕博士「古代の文字」(『講座国語史2 音韻史・文字史』昭47・9)「院政時代に入ると、

打聞集(長承三ハ一三四の年紀あり)のように、漢字片仮名宣命書ではあるが、殆ど返読の無い文獻が現れる。この点、宣命や祝詞に近いものであって、片仮名の字体が発達して簡略化するに従って、従来の万葉仮名を片仮名に置換えて生じたのが、この文体である。『今昔物語集』は、平安時代の写本は知られていないが、原本は多分この体裁であったと思われる。(略)なお、『国語学辞典』40P、『平安時代語新論』12Pなど参照。

大坪併治博士「片仮名・平仮名」(『鑑録 日本語8 文字』昭52・3)「訓点資料では、漢字の訓義を説明したり、文意に即した丁寧な読み方をしたり、文意を敷衍したりする場合に、漢字または異字

と、略体仮名、特に省文仮名とを混用した文体を用いた。それは、平安時代の最初期から用いられ、漢字・片仮名交り文の源流の一つとなった。(中略)

また、漢文や変体漢文を書く場合に、補読すべき助詞、助動詞、用言の活用語尾、接統詞などを、初めから書き添えることがあった。(中略) 漢文または変体漢文であるため、語序を転倒することが多く、いわゆる漢字・片仮名交り文とは異なっているが、語序を転倒しない場合は、漢字・片仮名交り文と同様であって、漢字・片仮名交り文の一の源流としたもの

「ㄱ」の表記法とその割合

表記法	巻数	A 不ㄱズ	B 不ㄱ	C 不ㄱ活用語尾+ズ	D 不ㄱ活用語尾	E 不ㄱリ	F 不ㄱ活用語尾+リ	G ズ
	1	78	7	6		2		7
	2	85	3	6		2		4
	3	89	2	4		2		3
	4	84	4	7		1		4
	5	86	2	5		2		5
	6	97	3	✓				✓
	7	93	3	3		✓		✓
	9	97	1	✓		1		✓
	10	91	4	4		✓		1
	11	66	66	✓		9	✓	✓
	12	95	1	3				1
	13	92	3	2		2		✓
	14	88	5	6		✓		✓
	15	90	1	6				3
	16	80	8	9		✓		3
	17	88	2	7		✓		✓
	19	79	9	9				3
	20	71	20	6		✓		2
	22	96	2					2
	23	31	46	2		4		3
	24	17	51			13	✓	4
	25	17	51	3		9	✓	2
	26	8	70	✓		2	✓	13
	27	82	✓	15		✓		2
	28	80	5	13				2
	29	81	✓	16				✓
	30	78	✓	18				✓
	31	83	3	13				✓

(注) ✓はその割合が1%未満であることを示す。

のと注目しない。」とされるが、前代との関連あるいは語序を転倒しない場合の説明はない。

(18) 山田孝雄博士『国語史 文字篇』、同『国語学史』

(19) 阿蘇瑞枝『柿本人麻呂論考』

(20) 稲岡耕二『万葉表記論』

(21) 注16に同じ。

(22) 築島裕『平安時代語新論』

〔付記〕本稿の『今昔物語集』の用例は、藤原久美子氏の『今昔物語集』の助動詞表記の調査に負うところが大きい。記して謝意を表わす。

(昭53・4・6稿)